

①二句目「運命在皇天」の「皇天」に込められている中国古典籍

この「皇天」については、既に『書経』『楚辞』等に用例が見えることは言及した。そして更には宋玉の「九辯五首」からの投影を通して考察すべきものではないかと考える。この作者である宋玉が屈原に仮託して、楚の懷王を想う心情を、道真に移すと、左遷の宣命を出した醍醐天皇、それを阻止しようとした宇多法王を想うそれと酷似していることに気付く。不本意な太宰府左遷、無実の心情を伝える術のない絶望的状况にあったであろう道真に、この宋玉の「九辯五首」は、どれほど心の支えになったか想像に難くない、まさしく道真自身の今の心情の代弁ともなっているこの作品を「皇天」という共通の詩語を使って、この道真の詩を読むものに想起させるという構造になっている所を見逃してはなるまい。

②十三句目「臨岐腸易斷」の「腸易斷」に込められている故事

『世説新語』「艶免」の一文。

③十六句目「啼聲亂杜鵑」の「杜鵑」に込められている故事

『文選』「蜀都賦」の「碧出襄弘之血、鳥生杜宇之魂」の注の一文

④五十五句目「傳築巖邊耦」の句に込められている故事

『史記』卷三「殷本紀」第三の一文

『孟子』卷第十二「告子章句下」の一文